平成二十五年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

第三十三冊

目次

一　「沿革誌」より……1
二　事業概要……2
三　資料の収集・保管……3
四　展　示……9
五　調査・研究……14
六　情報提供……16
七　教育普及……17
八　庶務報告……23
九　文化財保護……25

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

蟹江の歴史地図・地名の変遷展

昭和 40 年代蟹江町航空写真

平成 23 年 11 月 19 日（土）～12 月 18 日（日）

（月曜休館）　AM9:00～PM5:00　入 場 無 料

場 所　蟹江町産業文化会館１階 企画展示室

（蟹江町城一丁目２１４番地）

主 催　蟹江町教育委員会

問い合せ先　生涯学習課歴史民俗係（歴史民俗資料館）

TEL/FAX　０５６７－９５－３８１２

特別展開催にあたり

昭和４０年代蟹江町史を編纂している時代に「蟹江」という地名の由来について、川の河口部にあたる葭山などの湿地に多くの蟹が生息していたことに因んで付けられたことによると説明したならば、町民の方は誰も疑問を持たなかったと思います。

今回展示した昭和４０年代の航空写真などを拝見すると町内に蟹江川を始めとする河川や用水路が縦横無尽に流れていることが解り、平成１７年に撮影された航空写真と比較すると水域面積が異なって面白いと思います。

この地は、尾張平野（濃尾平野の愛知県側）の南部に位置し、木曽川が運んだ土砂が堆積することにより形成された地域です。古く平安時代頃から開墾が始まり集落が形成されてきました。時代が下り、海岸線は順次南下し中世には蟹江本町を中心に蟹江城が設置されました。江戸時代からは新田開発が盛んに奨励されて旧十四山村（現弥富市東部）飛島村が干拓されると蟹江町一帯は内陸部の町に位置することになります。江戸時代後期からは、尾張藩の命令による村絵図の作成などが行なわれて、地図としてそれぞれの地区情報が刻まれることになります。その後明治・大正・昭和の時代には測量技術が発展し多くの地図が作成されることになります。昭和２０年代以降は、航空写真による地図が登場し、この内容を比較することによって人々の生活の様子を理解することが出来るようになりました。今回の特別展は、その一部では有りますが、当町の歴史が理解できる地図資料を展示することとしました。その中には住居表示変更により消滅した字名なども書き込まれているものなどもあり、かつての蟹江の歴史を理解する貴重な存在であると思われます。

当館は、平成４年度から住所変更により歴史的地名が消滅しつつある現状を考慮し、地域住民に対して古くからある字名の由緒を紹介して郷土に対しての歴史的・文化的愛着を深めることを目的とした大字由来看板を設置してきました。今回の展示により当町の歴史形成や変遷に対して一層の理解が深まることを期待いたしましてここにご挨拶を申上げます。

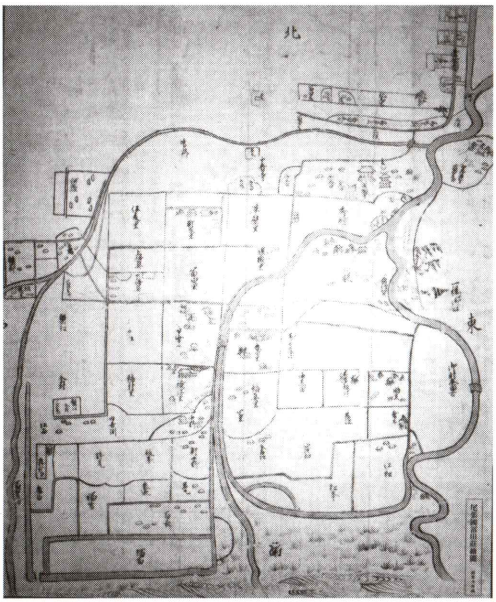
平成２３年１１月

蟹江町歴史民俗資料館

1　江戸時代までの蟹江

蟹江の地名については、昭和４８年に編纂された『蟹江町史』の「町のおこり」でいろいろ検討されている。河口部に蟹が群生していたところから「蟹江」という地名になったとの説を始め諸説を紹介しているが、定かではない。当館で開催した「蟹展」の際に、北海道根室沖のカニ岩から熊本県人吉市蟹作町まで日本全国に存在する約５０箇所の「蟹地名」を取り上げた。その地形背景などを考察すると、渓谷の沢、大きな川の付近、河口部、沿岸部などに多くの蟹地名が存在していることから「水」に関係があるようであり、その中でも洪水や高波を何度も歴史上に経験している「水害地名」と指摘する意見もあるようである。何れにせよ蟹は水辺に生息する動物であるので、ある意味で常に水が入る土地から「蟹江」と名付けられたとする説が妥当なのではないだろうか。

さて、文献史上「蟹江」が最初に登場するのは「水野家文書」にある建保３年（１２１５）の祐信譲状であるとされている。ただ、須成の龍照院本尊である木造十一面観音立像（国重文）は、胎内墨書銘から寿永元年（１１８２）に像造された仏像であるが、同寺が「蟹江山」の称号を持つことをあわせると水野家文書の時代より遡ることができると推測される。



円覚寺所有「尾張国富田荘絵図」

鎌倉時代円覚寺所有の『尾張国富田荘絵図』（室町時代）によると荘内を蛇行する河川に沿った下流部に「蟹江」「今村」など現在の地名が記載されている。戦国時代（１５００年代）には、伊勢湾海上交通路の要衝地として蟹江城が置かれ重要な役割を果たしていたようである。

なお、江戸時代に入ると蟹江地域を含め干拓による新田開発が盛んに行なわれ、次第に海岸線が南下し、「蟹江」という地名は、「蟹江本町」「蟹江新町」「蟹江新田」と分岐していくことになる。

江戸時代、尾張藩が藩内の状況を把握するために、寛政年間（１７８９～１８００）、天保１２年（１８４１）、弘化年間（１８４４～４７）の３度各村に村絵図を提出させているが、天保１２年と弘化４年（１８４７）の村絵図では、現在とほぼ同様の地形形態となっていることを理解することができる。

蟹江町歴史民俗資料館特別展

橋ものがたり

御葭橋

昭和40年代須成祭朝祭

平成24年1月28日(土)～2月26日(日)

月曜休館　午前9時～午後5時

場　所　蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室

(蟹江町城一丁目214番地)

主　催　蟹江町教育委員会

問い合わせ　生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)

TEL/FAX 0567-95-3812

開催にあたって

水郷のまち蟹江にはいく筋もの川が流れており、川の恵みをうけて発展してきた歴史があります。そして、川に架かる橋は、川をとりまく地域や人々を結ぶ大きな役割を果たしてきました。特に、蟹江町の中心を流れる蟹江川では、まちの発展とともに橋が増え、多くの橋が存在します。

また、橋は、地域や人々を結ぶだけでなく、その景観も形成してきました。蟹江町内に架かる橋には、霞切橋、月見橋など、その美しい水郷情景にちなんだ名前がつけられているものもあります。

さらに、須成にある御葭橋は、８月に行われる須成祭の宵祭・朝祭の時にだけに上げられるという、全国的にみても珍しい橋となっています。

今回の展示では、蟹江町内に存在する主要な橋を全てとりあげて紹介しています。これをきっかけに、水郷蟹江の歴史や民俗への理解をいっそう深めていただければと存じます。

最後になりましたが、開催にあたって資料提供や情報提供等においてご協力いただいた方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

平成２４年１月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

水郷蟹江の橋の歴史

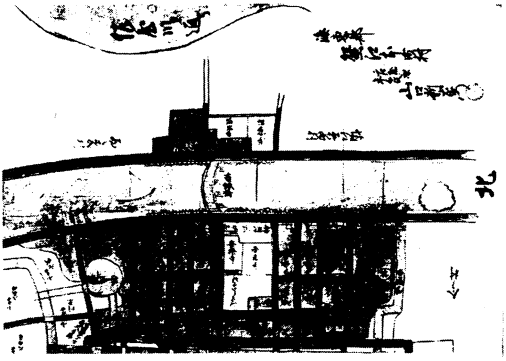
蟹江町は、中央に蟹江川、その西の端に佐屋川、東の端に福田川、南には善太川、そして蟹江川と日光川の間を縫うように佐屋川が流れるなど、南北に幾筋もの川が流れる水郷地帯。現在はそのなかを網目のように道がとおり、川には多くの橋がかけられています。では、これらの橋にはどのような歴史があるのでしょうか。

蟹江町の橋についての歴史は、江戸時代より前の状況はあまりよく分かっていません。その頃はまだ、人々の主な移動手段が船でもあり、また、低湿地のこの地域では川が増水するたびに流れが変わることもあるなど、あまり橋が設置されるような状況ではなかったのかもしれません。

江戸時代になると、橋についてのさまざま記録を確認することができます。宝暦２年（1752）の『尾州府志』には、蟹江橋、須成橋、今村橋、長橋（在蟹江新田）の橋の名がみられます。蟹江橋は現在の昇平橋、須成橋は天王橋、今村橋は今橋だと考えられます。これらは、後の村絵図でも確認することができます。

また、寛文年間(1661～1673年頃)にまとめられた『寛文村々覚書』には蟹江本町村に３つ、須成村に５つ、今村に１つ、蟹江新田に２つの橋があると記されています。しかし、実際にはもっと多くの橋があったとされています。

明治４年（1871）の蟹江新田の記録には多数の橋が記載されています。蟹江川のような主要な川だけでなく、支流や用水などの水路が無数に流れていたという状況を考えると、小規模な橋がたくさんあったことも想像できます。それでも蟹江川などの主要な川にかかる橋は少なかったため、時代が進むにつれ橋の必要性が訴えられるようになり、大正から昭和にかけ増設されていきました。昭和14年(1939)の「蟹江都市計画区域一般図」を見ると当時蟹江川には11の橋があり、現在では14の橋が架かっています。ただ、橋の数は単純に増えてきただけでなく、かつてはあった場所から姿を消したものもあります。



蟹江本町村絵図（部分）